様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６１７００１

研究課題名（和文）ポストコロニアル状況における「在日」の知の現在―その「独自的普遍」を問う

研究課題名（英文）Current perspectives of Korean Intellectuals Living in Postcolonial Japan:The 'Universal Singulier'

研究代表者
真鍋　祐子（Manabe, Yuko）

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：００３０２２５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　日本の論壇、学会に一定の地位を占める在日コリアン知識人の「知」の系譜をポストコロニアルの文脈から考察し、彼らがその民族的属性において「独自的」な存在でありながら、その語りが「普遍性」を獲得しうるゆえんを検討した。
　近年の日韓両国における歴史修正の動きを警戒し、ヘイトスピーチ、あるいはセウォル号事件等の社会問題をめぐって政治参与を試みる流れがある一方、慰安婦問題に対する言論活動が際立ったより若い世代では、当事者性に基づく普遍的価値を希求する姿勢が見出される。それは主に世代間の「独自的普遍」の質的変容によるポストコロニアルの視座の転換と捉えられる。

研究成果の概要（英文）：This paper reviews change in generational perspectives of Korean intellectuals living in Japan who are in a specific position in academic discussion and society in Japan in a postcolonial context, and then, examines how their discourse could gain ‘universality’ in spite of the ‘uniqueness’ in their ethnical attributes.
Alert to a recent tendency to historical revisionism in both Japan and South Korea, some Korean intellectuals participate in politics about social issues such as the accidental sinking of the MV Sewol as well as hate speech, while the younger generation tends to be more actively involved in speech activities about comfort women. This tendency shows that the stance of these younger Korean intellectuals is pursuing universal values as concerned individuals.This phenomenon can be considered primarily as a change in perspective among postcolonial generations in accordance with the intergenerational qualitative change of ‘universal singulier’ based on Sartre’s concept.

研究分野：文化学

キーワード：在日コリアン　ポストコロニアル　知識人　歴史認識　日韓連帯　韓国民主化運動　慰安婦問題

１．研究開始当初の背景

（１）1993 年以降、韓国民主化運動における「政治的自殺」の扱いに注目しながら、運動展開過程を儀礼論的に分析する研究を行ってきた。2009 年からは林香里（大学院情報学環・教授）らと「韓国現代史と光州事件研究会」を結成し、メディア・ジャーナリズム研究の視点を取り入れ、日韓市民連帯に基づく運動過程にも着目するようになった。そうした中で在日系メディアおよび在日知識人の役割と、韓国の学生運動世代と同世代の朝鮮学校生たちがはたした役割に括目するようになった。在日系論壇誌を拠点に一、二世によって構成されてきた言説、および現在、日本の論壇や学会で中堅をなす三世を中心とした若手世代による言説が、日本社会に対してもつインパクトの意味を考えてみたいと思うに至った。

（２）2011 年以降、日本およびその周辺諸国におけるポストコロニアル状況を解消するための歴史学として安冨歩（東洋文化研究所・教授）らが提唱した「魂の脱植民地化」に関する研究会に参加し、まずは自分自身の研究過程を内省する作業を通して韓国研究がはらむハラスメント性を解析した。これを在日の知識人や研究者たちに置き換えてみた時に、今まさにポストコロニアル状況を生きている彼／彼女たちがいかに「周辺性」という自己呪縛を解除し、逆にこれを知的創造性に転じているかという新たな問題意識が芽生えた。社会学や文化人類学において在日研究は膨大な蓄積をもつが、多くは「同化―異化」「戦略―戦術」などの枠組で在日の生き方の多様性を一括し、暗黙のうちに在日の「周辺性」は否定的文脈で解釈されている。実際は多くの在日研究者の仕事が示すように、彼らはその「周辺性」を全的に受け止めることで独自の生き方を模索し、独創的な成果をあげてきたと考えられる。そこで「超越論的故郷喪失」（姜尚中）という視点から、サイードのオリエンタリズム批判が西欧社会に衝撃をもって迎えられたように、日本社会に対して「支配的な知の脱構築」を迫るものとしての在日の「知」の系譜を取り上げてみたいと考えるに至った。

２．研究の目的

現在、研究者や文化人を含む「在日」知識人による言論が日本の論壇である一定の位置を占め、マジョリティである日本社会に影響力をもつという現象、ことに 2000 年代以降、若手・中堅世代の「在日」研究者たちにより、ポストコロニアル状況を反映させた、周辺性と多文化性をあわせもつ個性的な研究成果があがっている状況に着目し、日本社会における在日知識人の誕生と、その知の構築過程を解明することが本研究の目的である。

先行研究の多くは在日を他者化する視点を暗黙の前提とし、「周辺性」という在日の特性を否定的にとらえる価値意識によってきた。しかし「周辺性」は主体的に「独自性」へと転換されうるものであり、文化資本としての「多文化性」にも通ずる。なおこのアイデアは、「マルクス主義の目指す普遍性と、実存主義の拠る個別性」という両面から、ある知性の独自性を育てた諸要因に注意を払いつつ、「どうして彼は独自なのか」を理解しようとしたサルトルの「独自的普遍」の概念に依拠するものである。

本研究は「在日」を当面の課題としながらも、ゆくゆくはマイノリティ全般に適用可能な理論を提示し、「多文化共生」の一助となることを目指すための橋頭保と位置づけられる。

３．研究の方法

本研究はサルトルが示した「独自的普遍」の概念を応用し、独自の知的活動を展開する在日の知識人・研究者たちにおける「独自的普遍」の側面をつかみ出すことを目的とする。

まずは「普遍性」の側面として、光州事件（1980 年）に前後した時期以降の在日の知識人・研究者たちの知的活動をめぐる知識社会学的考察を行ない、他方で、グローバル化の流れを受けて「周辺性」をむしろ文化資本としての「多文化性」に転ずるという戦略的な「超越論的故郷喪失」が可能となった世代、つまり 2000 年代以降、目覚ましい成果をあげつつある若手・中堅世代に主眼をおき、そうした活動を可能ならしめた個別の「独自性」の側面として、書かれたものを主とした個別のライフヒストリーに注目する。あわせて、生育環境としての在日コミュニティおよび、そのルーツとされる韓国の地域社会に関して文化人類学的検討を行なう。

具体的には、①『季刊三千里』から『ほるもん文化』にかけての在日知識人たちの言論活動の展開過程を検討し、②在日というインナーサークルから日本の論壇や学会に一定の位置を占めるようになった事例を取り上げ、その知の構築過程を跡付ける。以上の検討を踏まえ、③若手・中堅の研究者たちを対象として、その言論に現われた「独自的普遍」の側面を探る作業を行なう。

４．研究成果

『季刊三千里』（1975～88 年）、『季刊民涛』（1987～90 年）、『ほるもん文化』（1990～2000 年）などの論壇誌は、当初は在日の書き手が中心となっていたが、次第に日本人の割合が増し、在日のみならず日本人の若手にとっても論壇や学会への人材輩出の役割をはたした。取り上げられるテーマは朝鮮史、日韓関係、日本の中の朝鮮文化、「在日」が定番であり、加えて４・１９（1960 年、四月革命）や５・１８（1980 年、光州事件）などの韓国現代史の事件にも関心が寄せられる。また、慰安婦問題に関する議論がいち早く取り上げられ、それ以外にも朝鮮人被爆者、在韓日本人妻、サハリン残留朝鮮人など、人びとの記憶から忘却され正史から除外された、よりマイノリティなるものの存在に対しても深い共感を伴った扱いがなされている。これは 70～80 年代の日韓連帯を支えただけでなく、現今の中堅・若手の研究者たちの思想と活動の素地にもなっていることがうかがえる。

また 70～80 年代の日韓連帯の時代に関しては、別途、東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターの一般プロジェクトとして平成 26 年度より進行中の「富山妙子画伯コレクション―第三世界と narrative art」プロジェクトにおいて受贈した富山所蔵資料の中に、日韓連帯による韓国民主化運動への在日知識人たちの政治参与を示す具体的資料が含まれていることが明らかとなり、資料整理と解析作業を進めている。

本研究にかかわる研究助成期間中、申請時には予期しなかった事態が日本と韓国で同時に進行し、在日知識人たちの活動にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。韓国で朴槿恵政権が、日本で第二次安倍政権が発足したのを機に、両国ともに歴史修正の動きが顕著になった。また特定のマイノリティ集団に対し憎悪表現を煽るネット右翼の言動が注目されたのも、両者に共通した現象であった。

そうした中、2014 年にセウォル号沈没事故が起きると、真相究明と責任者処罰、被害者救済に腰の重い韓国政府に対して在日有志が新聞に意見広告を出すなど政治参与の動きがみられた。また３・１１を機に反原発を旗印に日韓で連帯しようとする動きもあらわれた。加えて、４・３事件（1948 年）に対しニューライト勢力が名誉剥奪への動きをみせたことは済州島にルーツをもつ多くの在日に衝撃を与え、他方では 70 年代に朴正熙政権下で拘束された在日政治犯たちへの無罪判決が相次ぐなど、再び在日韓国人が韓国政治と結びつけられる出来事が重複して起きている。2009 年の韓国公職選挙法改正により、在日韓国人を含む在外国民に選挙権が与えられ、韓国政府に対して民意を示すこと

が可能となったことで、70～80年代の日韓連帯による民主化運動を彷彿させる動きも認められるが、それがこの先どの程度、韓国社会に対してインパクトをもたらすかは未知数である。

なお日韓連帯を通した民主化運動に対しては日韓双方からこれを再評価し、現在の情勢に即して再照明しようとする動きもみられた。その流れで、拙著『烈士の誕生―韓国の民衆運動における「恨」の力学』（1997年）の韓国語訳が刊行され、また日韓連帯を回顧する講演会などが開催された。

ひるがえって、日本国内に目を転じると、主に若手・中堅世代を中心として、ヘイトスピーチ問題と慰安婦問題に対する言論活動と政治参与が著しかった。「ヘイトスピーチ」の概念は、2009～10年の在特会による京都朝鮮学校襲撃事件を機に周知されるようになり、その後はカウンター活動など“もうひとつの日韓連帯”による政治参与を通じて、2016年5月にヘイトスピーチ規制法を成立させた。

慰安婦問題に関しては、かねてより朴裕河著『和解のために』をめぐり、日本の知識人とは一線を画した在日研究者たちによる批判が展開されてきたものだが、両者の懸隔は、新刊『帝国の慰安婦』が元「慰安婦」被害者の名誉を毀損したとして朴が韓国検察により在宅起訴されたのを機に、その争点が明確化された。あくまで被害者たちが体験した当事者性を重視するというゆるぎのない視点は、研究者自身の生活体験から実感的に引き出されたものと考えられ、そうした共振関係が、韓国軍によるベトナム戦時民間人虐殺の被害者たちへと及ぼされ、結果として「人権」という国際基準の価値と合致し、その言論活動が日本や韓国を超えて敷衍される。これは当該の在日研究者たちにおける「独自的普遍」の所以であり、歴史修正主義やヘイトスピーチに抗して韓国や日本の政府に働きかける政治参与をともなう言論活動との相違である。それは「独自的普遍」の質的変容によるポストコロニアルの視座の転換と捉えられよう。

以上を踏まえ、次の二点を特記したい。

ひとつは、在日を超えて、また韓国や日本という国家を超えて「独自的普遍」を可能にしているのは、生活経験を通じた「余白」という感覚ではないかという結論である。発達障害という自身のマイノリティ体験を在日のそれに重ねながら、人類学や現象学に基づく自著『自閉症者の魂の軌跡―東アジアの「余白」を生きる』を上梓したが、本書における「余白」とは、ホミ・バーバのいう「あいだ」（『文化の場所』）、姜信子のいう「空白」（『生きとし生ける空白の物語』）、また崔真碩がいう「私はいま、光のなかにではなく、影のなかに自らが在ることを自覚している」（『朝鮮人はあなたに呼びかけている―ヘイトスピーチを超えて』）ということと、ほぼ同義である。そして崔が、東アジアの平和を乱す日本帝国主義、日本軍国主義への「反」として「反日」を再定義し、「反日」に国境はないと述べるとき、それは、宋安鍾が『在日音楽の100年』の中で、「在日音楽」を「在日している音楽」と読み違えることで、この言葉に新たな酒が注がれ、「日系」を含む「新来」外国人在住者や「血のイデオロギー」などの悪しき規矩準縄にまつろわない日本人などすべての「在日者」に解放されるのだと語っていることと、「独自的普遍」という意味で通底しあう。

本研究を通じて得たもうひとつの結論は、日本と韓国、在日朝鮮人における「知識人性」の相違である。慰安婦問題および『帝国の慰安婦』をめぐるそれぞれの知識人たちの反応は、上述した「余白」「あいだ」「空白」あるいは「影のなかに自らが在る」という感覚との関連において生成される歴史意識の濃淡と深くかかわっているのではないか。この点

については、セウォル号沈没事件をめぐる韓国知識人たちの語りを分析し、また『帝国の慰安婦』をめぐる日本および在日の研究者たちの反応の相違に注目した考察を行なった。

最後に、2015 年に再び在日論壇誌『抗路』が創刊されたことに留意しておきたい。日本政府の歴史修正主義とヘイトスピーチに代表される排外主義の空気を受けながら、「在日」が透徹した歴史認識を確保することで「ともに生きる」未来を模索するために創刊したのだという。本誌を拠点とした今後の知的展開に関心を寄せたいと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 真鍋祐子、『在日音楽の 100 年』を再考する－それぞれの「解放」＝「パリロ」のために－、韓国・朝鮮の文化と社会、査読無、14 号、2015、239－245

② 真鍋祐子、歴史意識の詩学－「セウォル号の惨事」に寄せて－、学環、87 巻、査読無、2014、ｉ－iii

〔学会発表〕（計２件）

① 真鍋祐子、知識人と歴史意識－東アジアの「余白」をめぐって－、東アジア日本学会春季学術大会（韓国・全州）、2016.5.21

② 真鍋祐子、東アジアの「余白」を生きる－キリスト者として、研究者として－、2015．3.20、呉在植氏自叙伝『わたしの人生のテーマは「現場」』日本語版出版記念講演会（東京都文京区）

〔図書〕（計２件）

① 真鍋祐子、金景南訳、民俗苑（ソウル）、烈士の誕生－韓国の民衆運動における「恨」の力学－、2015、344

② 真鍋祐子、青灯社、自閉症者の魂の軌跡－東アジアの「余白」を生きる－、2014、331

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、一般プロジェクト「富山妙子画伯コレクション－第三世界と narrative art」、
http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/project/project.html

６．研究組織
(1)研究代表者
真鍋　祐子（MANABE　YUKO）
東京大学・大学院情報学環・教授
研究者番号：00302258

(2)なし

(3)なし